

# 南アフリカの現在

◆その1◆

社会科学部研究科  
博士課程後期三年  
藤本義彦



アフリカーナの聖地 フォートレッカーモニュメント

前回、南アフリカ共和国（以下南ア）の歴史を簡単に紹介した。今回は、南アでの筆者の経験を紹介させていただきます。

## 道に迷って

南アに留学して約一週間後、ポンコツだけれども車を購入した。ジョハネスバークの街にも慣れなければならぬ、と初めての日曜日に地図を片手にドライブに出た。  
しばらくあてもなく車を走らせ、位置を確認するために地図を見た。ところがそれはジョハネスバークではなく、プレトリアの地図。覚えていたのは、私の暮らしていたエマレンシアという町の名前だけ。太陽が北にあることを忘れていた私は、完全に道に迷ってしまった。

道端を歩いていたアフリカ人のおばさんに、「ここはどこなのか」と尋ねたが、言われる地名が私には分からない。「エマレンシアはどこか」と聞き直したら、「知らない」と言う。その気のいいおばさんは、歩いてきた人たちに聞いてくれた。アツという間に三十人くらいの人混みが見えたが、誰も知らない。最後に、車で通りかかったインド系のおじさんがエマレンシアまで連れて行ってくれて、「迷子」は無事家路につけた。見も知らぬ、しかも英語もたどたどしい日本人に親切にしてくれたあの人たちに、ただただ感謝するばかりだった。

だった。その後も、南アでの生活の中でいろいろな人に助けてもらった。南アの人たちに感謝！

## 車が壊れて

南アでの生活にもようやく慣れ始めた頃、ケープタウンに行こうと車で出かけた。ジョハネスバークからケープタウンまでは片道一四〇〇キロ。カルーと呼ばれる大平原をドライブとしゃれこんだ。が、南アの司法首都ブルームフォンテインを過ぎて二時間くらい走った時に、「事件」は起こった。ラジエーターの水漏れのためエンジンが壊れてしまったのだ。辺りは、三六〇度見渡す限りの地平線だけ。あるのは今まで私がドライブしてきた道と、これからドライブしていくはずの道だけ。本当に途方に暮れた。

三十分後、通りかかった車に近くの修理工場まで乗せてもらい、車をそのまま運び、修理してもらった。修理には数日かかる。ホテルもこの町にはない。ホテルのある隣町は約一〇〇キロ離れている」と言われ、絶望感、孤独感に急に襲われた。  
そうした状況の中では、人の温かさは心に滲みるものだ。困り果てていた私を、一〇〇キロ離れた町まで送ってくれ、しかも家にまで泊めてくれたアフリカーナー（オランダ系白人）のおじさん。アパルトヘイト政策を創ったのはアフリカーナーだと言われる。その

ネルソン・マンデラ大統領



大統領就任式に集まった人びと

おじさんもある意味では差別主義者であったが、アジア人である私には親切だった。私のアフリカーナーの人々に対する偏見を変える大きな契機にはなった。

## 銃撃戦

昨年四月の制憲議会選挙の前、当時まだ選挙への不参加を言い続けていたインカタ自由党（IFP）の集会を見に行った。IFPは南ア最大民族のズールー人を主体とした政党だ。ズールーの伝統的な衣装をまとう人も多く、ズールーの戦闘儀式に則った集会だった。奇声を発しながら、槍と盾を持ちデモンストレーションをする。端から見ていても恐いくらいだ。

その集会も中盤にさしかかった時、周辺のビルの屋上から突如、パン、パン、パンと銃声が聞こえた。集会に集まっていた人びとに向けての無差別テロだった。筆者の右三人目にいたアフリカー人は胸を撃たれた。左十人目くらいのアフリカー人は右大腿部を撃たれ、うずくまっていた。翌日の新聞には総計三十人余りの人が射殺されたことあり、見学などと悠長なことを言っている場合ではなかった。早々に逃げ出してしまった。

南アへの留学中、幸運にも犯罪に巻き込まれることはなかったが、この銃撃戦は、南アでの唯一の悪夢であった。

## 中国人に感謝

日本人は、アパルトヘイト体制下で不名誉な「名譽白人」という称号を南ア政府より贈られていた。一九八六年以降は、韓国人と中国人（台湾）もこの不名誉な称号を贈られた。南ア経済を潤しているアジアの国に対する贈り物であった。この贈り物？に見合う経済活動をこれらアジアの国は南アでしているのではあるが、なかでも中国人の商魂には、皮肉ではなく脱帽してしまっただ。

南アの料理はイギリス風だ、と言えばお分かりであろう。美味しいと思うのが少ない。留学当初はステーキを連日のように食べていたが、ステーキも毎日食べられるものではない。日本食を身体が欲し始めた頃、ジョハネスバーク

グの町中で中華街を見つけた。中華食の影に日本食の材料が顔を見せているではないか。醤油、お米、味噌、カレーのルーなど。留学中、毎週のように中華のお店に出かけ、お世話になった。中国人の商魂に敬意を表するとともに、感謝さえしている。

## 「アフリカ人はウソつきだ…」

アフリカ人の友人と「スーツ」という劇を見に行った時のことだ。この劇は、タウンシップ（白人都市の周辺にある「旧」黒人居住区）から朝早く出勤し夜遅く帰宅するアフリカ夫婦の悲哀を描いたものだ。劇の中には非常に悲しい場面がいくつもある。非常に感動することのない私ですら、涙を流しそうになった。感動的でした。

しかし、奇妙なことに気がついた。アフリカ人の観衆の多くが、そうした悲しい場面で笑っている。笑うところでも笑うのだが、悲しい場面になると笑うべき場面よりも大きな声をあげて笑っているのだ。友人に訪ねてみると、アフリカ人はそういう習慣なのだ、と取り合ってくれなかった。

後日、その友人と食事をした時、改めてそのことを尋ねた。彼は、「アフリカ人はウソつきなのだ。我々アフリカ人は、今まで口では言い表すことのできないほど、辛い思いをさせられてきた。そうした時、ただ笑うしかないではないか。あの劇にしてもそうだ。ほ

とんどのアフリカ人はあの劇にある悲劇を経験しているのだ。主人公を自分に置き換えた時、悲しんで涙するより笑うしかないのだ。アフリカ人は自分の感情を素直に表すことをしないウソつきなのだ」と。

二年間の留学生活の中で、私は一度だけアフリカ人が声を出して泣いているのを見たことがある。それは政治テロの犠牲となって死んだ少女の親が、遺体に泣きすがっている時のことだ。一般的にみんな明るく、常に笑顔を絶やさない人が多い。私のそのアフリカ人の友人も初めは常に明るく、にこやかに話しかけていた。しかし、親しくなるにつれて無愛想になり、静かにいろいろなことを話し合うようになった。アフリカ人であるが故に経験させられる不条理は、南アでは数限りなく多い。しかし、それでも腐ることなく生き抜いている。明日への夢と希望を持ち続けている。すべてのアフリカ人がそうだとはいえない。しかし、それがアフリカ人を、アフリカを、私にとって魅力的なものにしているのは確かだ。

南アでは有意義で愉快的留学生活を送ることができた。それもひとえに南アの友人のおかげだ。「人類に対する犯罪」とまで称されてきたアパルトヘイトを打ち破りつつある南アの人々へ、エールを贈りたい。（ふじもと・よしひこ）